

シリーズ

秘蔵写真

今は昔の林業

第15回

中部森林管理局技術普及課

井上 日呂登

今は昔、山村に暮らす人々とその生業としての林業を当局秘蔵の写真とともにご紹介します。

「下刈り」
したが



昭和三十一年の下刈風景
（現在の飛騨森林管理署管内）

植栽した苗木の成長が妨げられないように雑草木を刈り払う作業が下刈りです。植栽してから数年間、毎年、夏季に行われる作業ですが、暑い中での作業になることも多いため、林業の中でも最もつらい作業だと言われています。

かつては人が大鎌を振って下草を刈り払っていました。これは作業者の力量以外でも、

使う鎌が上手く研げているかどうかで作業効率が大きく異なり、作業途中であっても鎌が切れなくなれば砥石で研ぐものでした。

昭和三十年代中頃から国有林でもガソリンエンジンの刈払機かりはらいき（下刈り用の機械）が導入され始めました。肩掛け式の刈払機は現在でも見られますが、背負い式の刈払機が使われていたこともあります。また時代が経つにつれ電池式の電動刈払機も使用されるようになっていきました。



砥石で鎌を研ぐ風景（旧名古屋営林局管内）



背負い式の刈払機（昭和37年・旧長野営林局管内）

刈払機が使われ出すようになってもお、大鎌を使った作業は続きました。これは急斜面や太い雑草木の箇所など、大鎌で行った方が効率的な現場もあったからです。木の伐採や運搬は林業の機械化とともに大きく効率が上がりましたが、下刈りなどの造林作業をより効率化することは現代でもなお課題となっています。



真夏の下刈り

ここで紹介している写真は、当局サイト「モノクロ森林紀行」で紹介しております。

これは、カラー写真のない時代へ時を超えて！むかしの写真を紹介するサイトです。

当サイトへは、QRコードを読み込んでください。

